

# 満州で広まった「雨ニモマケズ」

鈴木 貞美

## 中国語訳を「芸文」に確認

トに記した「雨ニモマケズ」が満州の中国人農民に読まれることになるとは、誰も思わなかった。

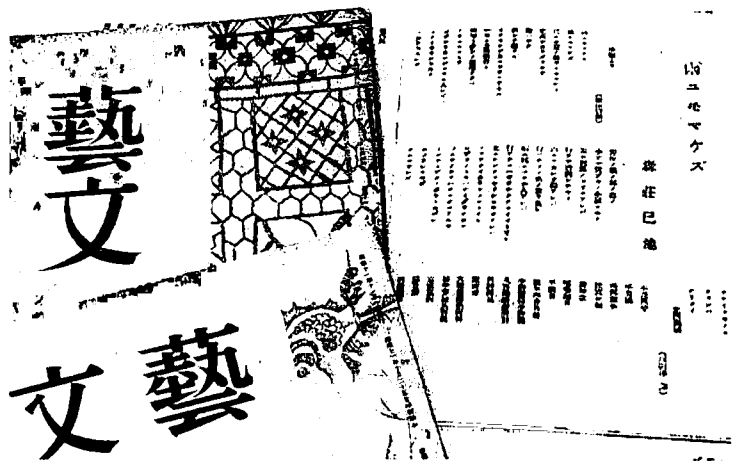
賢治没後十一年、四四(昭和十九)年の夏、奉天市(現瀋陽市)を中心とする中部満

州に、日本語と中国語訳の「雨ニモマケズ」を印刷したチラシが配られた。チラシを作成したのは「満州国」の文化機関である協和会で、城内の農家からの穀物供出量を増やすためだった。賢治の詩は

その思惑通り農産物の増産に一役買い、協和会事務局長は「まったく宮沢賢治さんのおかげ」と感謝していた。このことは作家の森庄巳池が戦後まもなく書いた文章で触れている。

森は戦前から賢治の作品を世にひろめることに努めていた人。森はその文章で、昭和十九年に渡満して「満州国」の総合雑誌「芸文」に賢治についての記事を書き、そこで紹介した「雨ニモマケズ」の漢訳がチラシに印刷された、と振り返っている。

森の文章を調べた賢治の研究者 杉浦静氏は、満州で出回った漢訳「雨ニモマケズ」は、いったい誰のどんな翻訳だったのか、謎だと書いている。「修羅はよみがえった」宮沢賢治記念会発行、二〇〇七年。筆者は森のその記事を、つい最近、「芸文」一九四四年八月号に、確認することができた。



雑誌「芸文」1944年8月号掲載の「雨ニモマケズ」とその漢訳(コピー)。左は同年7月号、11月号の実物(日本近代文学館蔵)

いまの若い人は、冬の渡り鳥を買って、ビニールで包んでおくと思っているのか。一九一八(大正七)年、宮沢賢治が二十二歳のとき、友人にあてて書いた手紙に、こんなふう

に渡り鳥に話しかけると書いてある。

「満州から飛んで来る渡り鳥のうちで一番早いのはお前か」

日露戦争のうち、満鉄(南満州鉄道株式会社)の利権が確保され、満州は日本の東北の若者にも身近になっていった。だが、賢治が晩年のノ

とに角わたくしは歴史離れがしたさに「山椒大夫」

を書いたのだが、さて書き上げた所を見れば、なんだか歴史離れがし足りない。こう嘆くのは森脇外だ。歴史そののままか歴史

### 大波小波

離れか、鴨外は、大正の御世に中世伝承物語「さんせうたゆう」を再話化する自由と不自由をいっ

ているのだが、それなら、世評の高い奥泉光「神器」軍艦「檀原」殺人事件」はどうなるのか。歴史離れが足りているのか、し過ぎ

### 歴史そのままか歴史離れか

ているのか。大日本帝国連合艦隊の物語。戦艦「矢矧」も登場すれば「無左志」も登場する。神聖帝国ニッポンをバ

北国農謡  
不良風俗  
不良雨  
所得寒冬  
壮突身軀

「雨ニモマケズ」と題し、冒頭に「手帳より」として、「雨ニモマケズ」と銭稻孫訳「北国農謡」を掲げていた。銭稻孫は、当時、北京大学総長。この訳を含めた漢訳日本詩歌のアンソロジー「日本詩歌選」を、すでに北京と東京で出版していた。森の記事は、火野葦平が新聞連載小説に「雨ニモマケズ」を引用したことや、「満州国」の女学生たちが映画「風の又三郎」を見ていたことなども記している。そして、誰か「雨ニモマケズ」を「満州国」中に配布してくれないか、と訴えている。

この願いが、ほどなく実現されたわけだ。「満州国」では「大東亜共栄圏の模範たれ」と掛け声がかかり、「民族協和」の旗がいつそ高く掲げられていた。過酷な農作業ものともしない肉体の健康をたたえ、正しく働まして生きたいと祈る「雨ニモマケズ」は、中国人農民にも大いに訴えた。立派な翻訳だったことも手伝っているのだ。う。

「芸文」八月号の森の文章は、こいつ結ばれている。「まこと」に「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」。米英を完全にアジアの地から駆逐しなければならぬ。

こちらの願いは、もちろん、かなわなかった。が、森が賢治のことを借りて「世界のぜんたいを幸福にする」ために「雨ニモマケズ」を配ってほしいと心から願ったことは、よくわかる。

(すすき・さだみ「国際日本文化研究センター」教授)